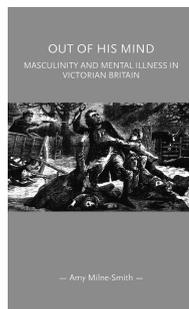


書 評

Amy Milne-Smith, *Out of His Mind:
Masculinity and Mental Illness in Victorian
Britain*

(Manchester: Manchester University Press, 2022)

矢次 綾(松山大学)



ヴィクトリア朝のイギリスにおいて、心的疾患 (insanity, madness, lunacy) があると診断されたらどのような対応を受けたのか。診断に対し患者はどのように反応したのか。メディアはこの件に関する一般認識にどのような影響を及ぼしたのか。19世紀末、退化論と心的疾患はどのように関連づけられたのか。ミルン=スミスは以上の点について、男らしさ (masculinity) の条件として自分自身をコントロールできることが大きく、感情をコントロールできずに本能に従うのは男らしくないと見なされていたことに留意しながら分析している。対象とする時期は、Lunacy Act (法律名は英語のまま記す) が制定され、心的疾患患者への対応について法整備がなされた1845年から、多くの兵士がシェルショックに罹患した第一次世界大戦前までである。

疾患があると診断されれば、自分をコントロールできない失格者と認定され、働く権利や決断を下す権利を事実上奪われる。そのような場合、本人やその家族にどのような選択肢があったのか。ミルン=スミスは最初の2章でこの点を吟味し、第1章 (Man in care: the asylum) では公的に提示された選択肢すなわち療養型病院 (asylum) への入院に焦点を当てている。療養型病院の目的は健康的で快適な環境を患者に与えることだったが、入院は経済的に破綻して救貧院に入る以上の恥辱と見なされ、見方によれば、そこでの権利は刑務所よりも制限されていた。それでも多くの患者が入院した理由は、他の選択肢が多額の資金を要したから、そして男性患者による暴力を家族が恐れたからである。男性は本来、暴力的だと信じられると同時に、本性をコントロールすることが男らしいとされた当時、暴力的で

あることは心的疾患の症状と見なされ、男性患者が妻や子供を殺害したという新聞記事が出回っていた。一方、患者が暴力を自分自身に向けて死に至るケースや、介護人による暴力の犠牲になるケースが公になることは少なかつたが、否定的な印象は払拭されず、世紀が変わる頃、療養型病院は治癒不可能な患者の収容施設と化していた。

第2章 (Men in the community: home care, doctors' care, and travellers) では、患者の自宅や認定された医師などの個人宅での療養や、治療の一環としての旅などに焦点が当てられている。治療目的で旅した人物の一人としてJ・S・ミルがいる。中産階級の男性にとって仕事がアイデンティティの源だったことから、たまに神経衰弱に陥っても仕事を続けていたミルだが、父親の死後の衰弱は深刻であり、ブライトンで療養するも経過が芳しくなかつたため、医師にヨーロッパ旅行を勧められたのである。ミルン＝スミスは患者が文学作品の中でどのように描出されているかにも触れており、個人宅での療養例として『デイヴィッド・コパフィールド』のディック氏を挙げている。ディック氏は実兄が彼の疾患を恥じて面倒をみてくれなかつたので、遠縁のベッチー・トロットウッドと同居し、彼の収入はベッチーの家計の足しになっている。ミルン＝スミスによると、収入がある患者の場合、裁判所の監督下に置かれる可能性があつた。ただし、正式な法手続きをしないケースが多く、ディック氏もそうだったと考えられる。

ディック氏は穏やかな人物だが、男性の心的疾患患者は暴力的であり、家族の安全のために療養型病院に入るべきだと一般に考えられていた。ミルン＝スミスは触れていないが、評者の頭を過つたのは、ギヤスケルの短編小説「一時代前の物語 (Half a Life-time Ago)」において、疾患のある弟の暴力をヒロインが身体を張って隠し通したことである。ヒロインは弟を入院させようとする婚約者に反発し、婚約を破棄して独り自宅で弟の面倒をみている。ミルン＝スミスはチャールズ・モリノーとヘンリー・ムーの研究を挙げながら、家族が愛情から男性患者を自宅で療養させた成功例があると述べているが、ヒロインのケースは成功例と言えないだろう。弟の暴力はヒロインが破談した後に激しくなっており、彼女はただそれを抑え込むのではなく、他人がそれに気づかないよう人付き合いを避け、「世捨て人」のレッテルを貼られるほどだったからである。ヒロインが必死だつ

た理由は、療養型病院について悪い噂を聞いていたからというより、男性患者が一般にどう思われているかを知っており、入院させるよう説得を試みる人物が他にも現れることを恐れたからではないだろうか。なお、婚約者が弟の入院を画策した理由は、入院させることにより心的疾患患者であることを確実にして農場の相続権を弟から奪い、その実姉の夫になることによって自分が相続人になるためである。

第3章 (Personal shame: failures of morality and the will) では恥辱、第4章 (Madmen out of the attic: reputation, rage, and liberty) では怒りをキーワードに、心的疾患があると診断された人々や家族の反応が分析されている。恥辱がキーワードになる理由は、心的疾患が自己コントロールによって回避可能であり、回避できないとすれば、意志の弱さによる恥ずべき事態だと見なされていたからである。コントロールし損なった結果生じた発症要因として、過度の飲酒や暴飲暴食、不眠、自慰や性行為への傾倒、梅毒、同性愛が挙げられている。食事などは生活習慣の範疇であり、それらや、それらが引き起こした(と考えられた)疾患を批判的に診るのではなく治療に専念するよう、ハヴロック・エリスは医師に警告している。しかし、医師も患者もその家族も、否定的な感情を一切持たずに症状と向き合うことは困難だった。ダーウィニズムの影響から、遺伝疾患だけではなく、過失に陥りやすい気質も遺伝すると信じられていた当時、患者の家族にも偏見の眼差しが向けられた。この点を裏づけるかのように、心的疾患専門の小児科医レジナルド・ラングドンは、息子が生来の疾患の持ち主であることを隠し続けていたとミルン＝スミスは記している。

疾患があると診断された場合、多くの人々は社会的な圧力から、発症した責任は自分にあると諦念した。一方、そう診断されることは、自分自身、家族、そして財産を管理する能力がないと断定され、自分の意思でことを成す権利を奪われるに等しかったため、その権利を取り戻すと同時に恥辱を解消すべく、怒りをもって異議を申し立てる人々もいた。その背景に、さらに、治療には患者の同意が不可欠だと主張されるようになった背景に、健常者が入院を強いられたケースが数多く露見し、それに起因する騒動 (lunacy panic) が起きたことがある。その中でも、下院が調査委員会を発足させた1858年から翌年にかけての騒動と、診断や入院の経緯について実

際に調査された1876年から翌年にかけての騒動がよく知られている。ただし、異議申し立ては恥ずべき行為であり心的疾患の証拠だとしばしば見なされたことや、自分にどのような権利があるかを理解し、異議を申し立てるために必要な財力を持つ人々が中産階級や上流階級に限られていたことに注意を払うべきだとミルン＝スミスは主張している。

診断やその後の対応に不服を唱える人々を支援する団体として、例えば、1873年にルイーザ・ロウによって設立されたLLRA (Lunacy Law Reform Association) がある。ロウが注目した案件の一つが、H・J・ドドウェルのケースである。突然の解雇に対し訴訟を起こすも棄却されたドドウェルは、世間の注目を集めるために銃撃事件を起こす。彼は正気ではなかったという理由で一般的な暴行 (common assault) 罪について無罪判決が下されるが、ドドウェルは療養型病院への入院を余儀なくされ、心的疾患がないことを証明するという新たな戦いを強いられる。その戦いは国会や内務大臣を巻き込み、疾患はないと診断する医師もいたが、結局ドドウェルは病院内で生涯を終えている。

ミルン＝スミスは最後の2章で、心的疾患に関連する世評について吟味している。第5章 (Media panics: stories of violence, danger, and men out of control) では、男性が起こした暴力事件についての煽情的な報道を、家庭内暴力、列車のコンパートメントといった閉鎖的な空間での暴力、ホワイトチャペル殺人事件など通りすがりの暴力、心的疾患患者が起こしたとされる事件の4つに分けて分析し、加害者の衝動性、体力の計り知れなさ、狡猾さが報道の中で強調されていることをあぶり出している。それらが心的疾患患者の特徴だと一般に信じられていたことから、ミルン＝スミスは、このような報道が、心的疾患患者は狂暴であるという一般感情を反映すると同時に、患者に対する恐怖心を煽ったと判断している。一方、女性が起こした事件の報道にはそういった側面を見出しにくい理由として、例えば嬰兒を殺害した母親は、加害者であるだけでなく、貧困などの克服し難い事情を抱えた被害者だと見なされ、心的疾患があると仮に診断されても恐怖心ではなく同情が寄せられる傾向にあったことが挙げられている。

1850年代において既に、男性の遺伝的要因による弱体化と社会構造の急変によるストレスが神経衰弱を誘発し、国家的な危機をもたらすのでは

ないかと懸念されていた。男性の弱体化が国家的な危機と関連づけられる理由は、女性の心身はもとから弱く、疾患は母体を通して遺伝すると考えられていたからである。第6章 (Degeneration and madness: inheritance, neurasthenia, criminals, and GPI [General Paralysis of the Insane]) では、以上の点と、1880年代に注目された退化論の関連について論じられている。

ミルン＝スミスによる以上の議論を、文学を専門とする評者は、既に言及した「一時代前の物語」を含め、ミルン＝スミスが触れていない作品も時折頭に浮かべながら読んだ。『バーナビー・ラッジ』はそのうちの一作である。母体を通して疾患が伝わるという見方を裏づけるかのように、バーナビーの手首の血痕は、夫が殺戮行為を犯したことに気づいて母親が受けた衝撃が母体を通して彼に伝わった証拠であり、彼の生まれながらの心的疾患の要因がどこにあるかを暗示している。常日頃は無邪気で愛情深いバーナビーだが、母親の制止を振り切って暴徒に与すると、打って変わって猛々しさを発揮する。この猛々しさ、もしくは暴力性は心的疾患の症状というよりも、彼が父から受け継いだ邪悪な側面が、ゴードン暴動という機会を得て表面化したものと評者は解釈していた。しかしながら、ディケンズはバーナビーの猛々しさを疾患の症状としても描いていたのかもしれない。ディケンズは、ベツレヘム精神病院から逃亡した3人の患者が暴動を先導したという設定で『バーナビー・ラッジ』を構想していたのだから、とミルン＝スミスの著書を読みながらあらためて考えてみた。